

「夢あおば」の低コスト多収技術の確立

飼料用米専用品種「夢あおば」の窒素施肥は、5月下旬移植では基肥に1.2kg/a、6月中旬移植では基肥0.9kg/a＋追肥0.5kg/a（出穂前20日）が適していました。また、低コスト化のため高密度播種や疎植で栽培をしても、慣行と同等の精玄米重を得られました。収穫時の籾水分を下げるため収穫を遅らせる場合には、脱粒に注意が必要です。

【背景】

現在は主食用米の増産について注目が集まっていますが、農業経営の安定を図るためには、多様な用途の米の作付を経営に組み入れることが必要です。飼料用米については、一般品種（主食用品種）を作付けした場合の支援水準（水田活用の直接支払交付金）が、令和6年度から段階的に引き下げられているため、本県では収量性に優れる専用の多収品種「夢あおば」の導入を推進しています。本試験では「夢あおば」の最適な肥培管理、栽培の低コスト化や、立毛乾燥適性及び脱粒性について検討を行いました。

【結果】

●肥培管理

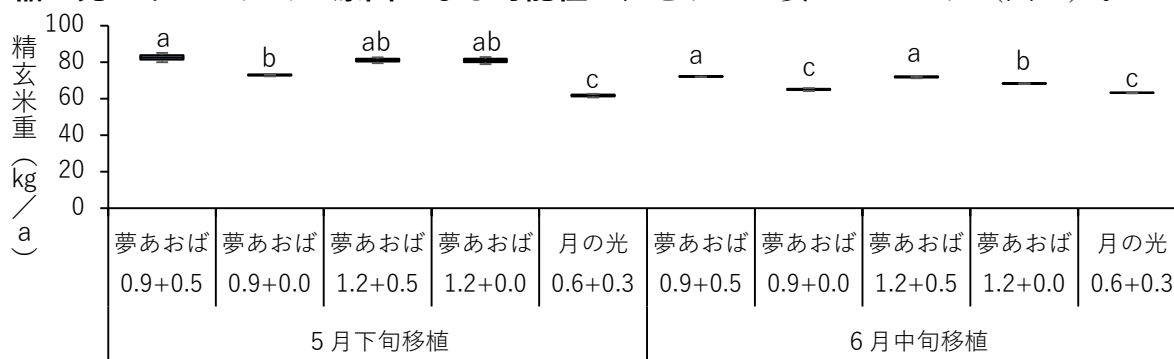
5月下旬移植は基肥1.2kg/aのみで精玄米重が多く、追肥を施用しても差は無く、6月中旬移植は基肥0.9kg/a＋0.5kg/a、基肥1.2kg/a＋追肥0.5kg/aの間に差は見られませんでした。収量性と施肥量を考慮し、**最適な施肥量は5月下旬移植で基肥1.2kg/a、6月中旬移植で基肥0.9kg/a＋0.5kg/a**でした（図1）。

●低コスト栽培

高密度播種（300g/箱、200g/箱）と疎植（11.1株/m²、15.2株/m²）を組み合わせる検討を行いました。いずれの処理も慣行栽培（150g/箱＋18.5株/m²）と収量の差がなかったことから、**高密度播種と疎植により育苗にかかる費用を最大7割削減することが可能**でした（図2、3）。

●立毛乾燥適性及び脱粒性

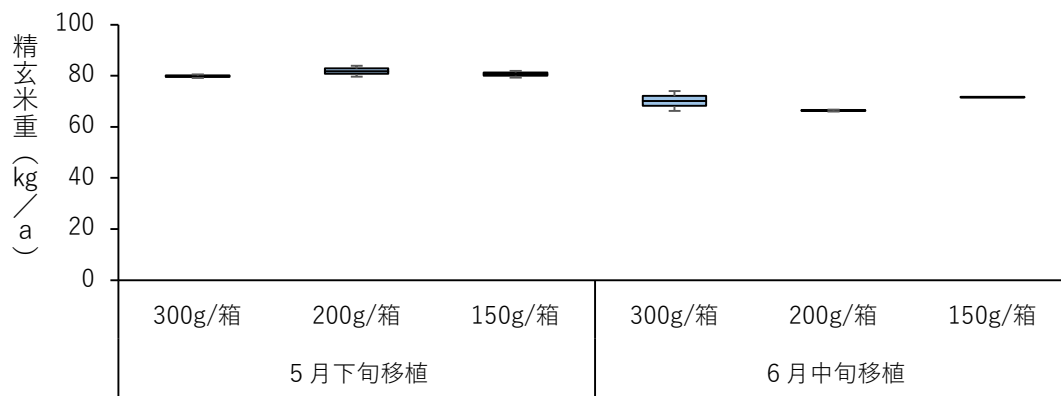
籾水分が、成熟後10日程度で15%台まで乾燥が進みました。収穫を遅らせることで乾燥に掛かるコストを下げる事が可能と考えられます（図4）。ただし、**脱粒性は月の光より顕著**であり、収穫遅れにより増加することから、**次期作で食用の品種に転換する際に漏生稲の発生やコンタミの原因となる可能性**に注意する必要があります（図5）。



注1) 移植時期 5月下旬移植は5月22日、6月中旬移植は6月13日。

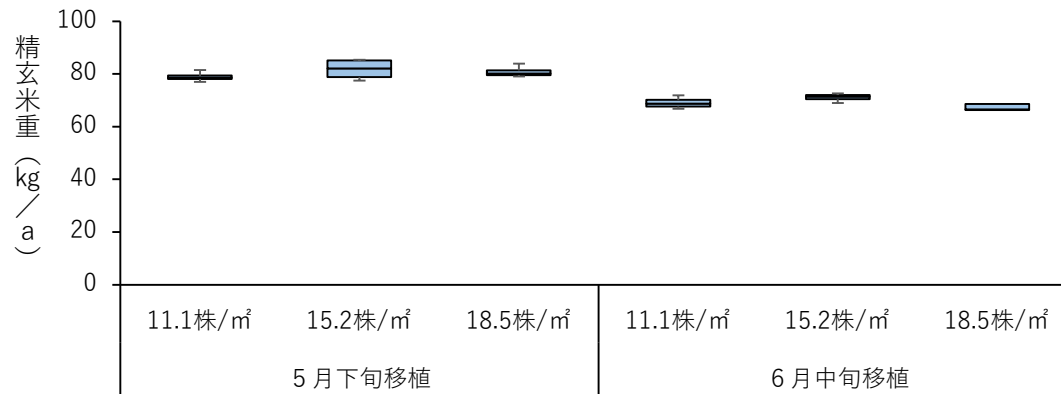
注2) Tukey法により、異なるアルファベット間に有意差あり (p<0.05)。移植時期ごとの比較。

図1 移植時期別、肥培管理の収量比較（2024年）



注1) 施肥量は基肥 9 kg/10a、追肥 5 kg/10a (出穂前20日)

図2 播種量ごとの収量比較 (2024 年)



注1) 施肥量は基肥 9 kg/10a、追肥 5 kg/10a (出穂前20日)

図3 栽植密度ごとの収量比較 (2024 年)

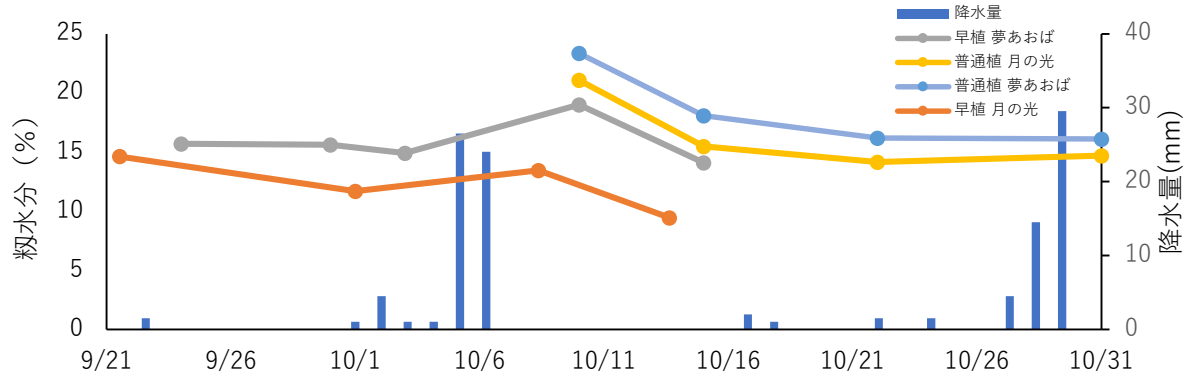


図4 成熟期後籾水分の推移と降水量 (2024 年)

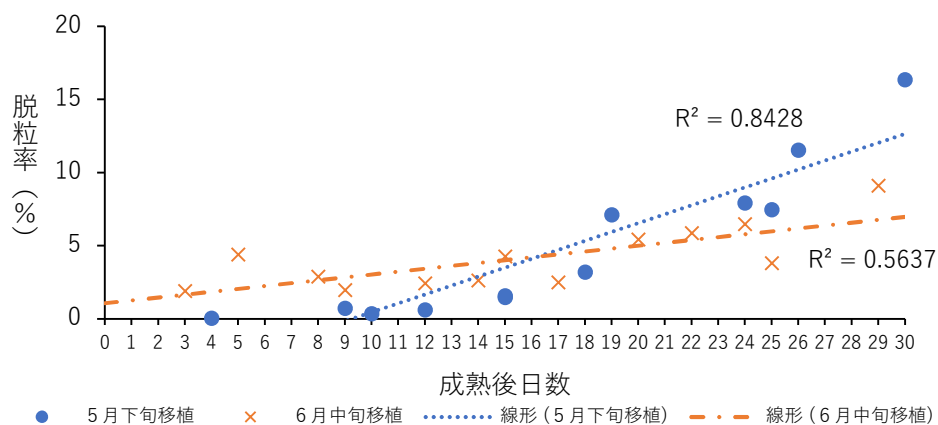


図5 移植時期別による脱粒率の推移 (2023 年、2024 年)

(水稻研究室 山口 昌宏)